

【5】

氏名(本籍)	ささ 笹	ざわ 澤	ゆたか 豊	(茨城県)
学位の種類	文学博士			
学位記番号	博甲第118号			
学位授与年月日	昭和57年3月25日			
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当			
審査研究科	哲学・思想研究科 哲学専攻			
学位論文題目	ヘーゲル哲学形成の過程と論理			
主査	筑波大学教授	文学博士	中 埜	肇
副査	筑波大学教授	文学博士	永 井	博
副査	筑波大学教授		高 木	勘 弐
副査	筑波大学教授		柳 沼	重 剛
副査	筑波大学助教授		水 野	建 雄

論 文 の 要 旨

(1) 本論文は、ヘーゲルの壮大な哲学体系の思想的な基盤とその核心をなす論理的な枠組みとが、既に青年期(チュービンゲンにおける学生時代に始まってベルンおよびフランクフルトを経てイェーナに至り、彼の最初の大著である『精神現象学』の刊行される前まで)の思索の中で徐々に形成されたという判断にもとづき、その形成過程の内的必然性を、若いヘーゲルの哲学的発想の展開との関わりにおいて、難解な原資料(手稿および論文など)の分析的解釈によって考察し、上記の判断の正当性を論証しようとする真摯着実で創意に富む労作であって、序論、第一章「青年期の思索展開」、第二章「体系と原理」、第三章「思弁的思考の形成と市民社会」、第四章「体系としての人倫」、第五章「意識と人倫の問題」、第六章「『神の死』と和解」、第七章「無限者の形而上学」、第八章「歴史性の哲学と歴史的現実」から成る。

(2) 序論ではヘーゲルの哲学的思考の発条ともいえるべき「否定的なもの」の意義を、この哲学の歴史的な位置づけと関連させて論じ、さらに後年に至って完成するヘーゲル哲学の「体系」と青年期における「体系以前」の思想とが密接に関連することを指摘し、論文全体の基本視点を明確にして、以下の諸章への導入とする。

(3) 第一章では、ヘーゲルの『初期神学論集』および『ドイツ憲法論』と称される諸手稿にもとづいて、神学的には「地上における神の国の現前化」、哲学的には「理念と現実との統一」というヘー

ゲル哲学を一貫するモチーフが青年期の思索の中でどのように展開し、またそれがどのようなアポリアに逢着せざるをえなかったか、そしてそのアポリアの克服がその後の彼の哲学的思考の展開にとってどのような意義を持つかを指摘する。

(4) 第二章では、初めて「哲学者」たる自覚をもって自己の哲学体系の建設に着手したイエーナ初期のヘーゲルの著作（著書『フィヒテとシェリングとの哲学体系の差異』および論文「信仰と知」など）を精細に分析することによって、当時の彼の哲学的思考を支える基本的なモチーフと彼が今後において建設しようとする哲学体系との原理的な関連を考察する。

(5) 第三章では、フランクフルト期に書かれた「愛」に関する断片とイエーナ期の手稿「人倫の体系」および論文「自然法の学問的な扱い方」とを比較検討することによって、「愛による法的権利関係の止揚」というヘーゲル固有のテーマが、フランクフルト期における「愛」からイエーナ期における「思弁」へという原理の転換に対応して、どのように展開するかを分析する。

(6) 第四章では、手稿「人倫の体系」と論文「自然法の学問的な扱い方」との解釈にもとづき、ヘーゲルが「現実」を「思弁」によって「体系」の中に包摂する方法が「体系以前」にはどのように展開するかという問題を、当時の彼の民族国家の理念すなわち「有機的人倫」の考え方の中にさぐるかと試みる。

(7) 第五章では、イエーナ初期の手稿「実質哲学Ⅰ」を中心にして、ヘーゲルの独創にかかるきわめて重要な倫理的基礎概念である「人倫」を、同じく彼の重要な哲学的視点である「意識」との関連において考察し、哲学体系を志向する「思弁」と「現実」との媒介の問題がヘーゲルの思索の中で深化する過程を追求する。

(8) 第六章では、手稿「実質哲学Ⅱ」および「人倫の体系」によって、同じくヘーゲルの哲学の根本にかかわる重要な主題としてのその哲学とキリスト教との内面的関連を、「イエスの死」をめぐる青年ヘーゲルの思索の中に探り、宗教的「表象」が哲学的「概念」へと深化する過程を分析する。

(9) 第七章では、手稿「イエーナの論理学・形而上学・自然哲学」および論文「自然法の学問的な扱い方」にもとづいて、ヘーゲル哲学の核心にある「実体—主体」の理説を主として概念の次元において考察するために、「無限者」という概念の母型として青年期の思索の中心にあった「生」という概念の展開を追求する。

(10) 第八章では、「自然法に関する講義草稿」その他を手がかりとして、理念と現実との統一（「地上における神の国の現前化」という課題をもつヘーゲル哲学は、一方では理論的な体系を旨としながらも、その意図において本質的に実践的であるから、理論と実践との統一として「歴史哲学」であらざるをえないことを論証し、その点で、完成した彼の哲学体系と青年期の思想との内面的関連を確かめる。

審 査 の 要 旨

(1) ヘーゲル哲学の本質をその完成した体系においてではなく、むしろその形成過程、すなわち『精神現象学』刊行以前の青年期における彼の思索の中に求めようとする試みが、今世紀初頭にディルタイやノールらの研究と原資料の編集とによって本格的に開始されて以来、その重要性に対する認識はますます高まりつつあるが、ことに当初はフランクフルト期までに限られていたその試みが、第二次大戦後はイエーナ期にまで拡大され、かつ文献的な手法の精密化とあいまって、ヘーゲル青年期の未刊の手稿や断片に関する徹底した整理と検討がヘーゲル・アルヒーフを中心にして行われ、それによって前記ディルタイらの仕事も批判修正されるとともに、この文献学的研究にもとづいてヘーゲル哲学の形成過程に関する緻密な研究が、現代ヘーゲル研究のひとつの焦点をなしていることは周知の事実である。しかしこの研究の基礎となるヘーゲルの手稿や断片は、彼自身が刊行を期したものではないだけに、未彫琢・未推敲であって晦澁をきわめたものであり、これを正しく解釈して彼の思想展開の過程を分析することは至難の業であり、イエーナ期のものについてその困難がとくに大きいことも広く認められている。したがって世界的に見ても、イエーナ期までのヘーゲルの哲学形成に関する包括的で決定的な成果はまだ出ていないというのが現状である。

(2) 本論文の筆者は敢てこの難事業に挑み、ヘーゲルの哲学的思考の原構造と言うべきものが彼の青年期の思索の中で一定の必然性をもって成熟し形成されてきた過程を、ヘーゲルの多くの手稿および若干の刊行著作と論文を精読し、これらを自らの思考によって分析しつつ論証した。この原構造には、最も簡単には、「実在は素朴な自己同一から分裂外化を経て統合へと進み、万有はその展開の中に位置づけられる」と定式化されるが、青年期におけるヘーゲルの思索動機が神学から始まって政治・社会・経済など現実的諸学問を経て哲学的思弁へと移行するに応じて、上記の実在は「生命」から「人倫」を経て「精神」へと発展し、これと対応して原構造も「愛による運命との和解」、「民族による市民社会の克服」、「思弁による現実の包摂」から、さらに進んで「直観と思弁との統合による反省の止揚」として哲学的に定式化されるにいたる。本論文はこの過程をヘーゲルの青年期の全体にわたって一貫したコンテクストのもとに論証したものであって、これは独創性のきわめて高いものとして評価される。

(3) 本論文には序論の展開において若干の不備があり、概念の明晰化と消化において不十分な点も残っており、かつ参考文献（セカンダリー・ソース）の面で考慮すべき余地が見られるなど、多少の難点があることは否みえない。しかしそのような欠点にもかかわらず、初めに述べたように、ドイツ本国の研究者たちによってさえも「晦澁きわまりない」と称される原資料を解釈して、ヘーゲル哲学の原構造を明らかにしようとした努力と強靱な思索は賞讃されるべきであり、また筆者が本論文において達成した成果は、独創性の点で本邦ヘーゲル研究のうちでも高い水準に達しており、これが公刊されるならば、本邦の学界に裨益するところは大きいであろう。なお筆者は既に学会機

関誌に発表した論文および口頭報告によって新進のヘーゲル研究者として注目を集めつつあり、将来における大成が強く期待されている。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。